



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	教員との連携による情報リテラシー教育支援 ~東京学芸大学附属図書館事例報告~
Author(s)	大谷, 朱美
Citation	現代の図書館, 45(4): 213-219
Issue Date	2007-12
URL	http://hdl.handle.net/2309/74087
Publisher	日本図書館協会
Rights	

情報リテラシーの育成と図書館サービス

特集

教員との連携による
情報リテラシー教育支援

◆東京学芸大学附属図書館事例報告

大谷 朱美

1. はじめに

東京学芸大学1年次必修科目「情報処理」(15コマ/90分)のうちの1コマにおいて、附属図書館職員による情報リテラシー教育支援が、2007年度より正式に開始された。教員による『情報処理』の授業内容・教材のあり方等に関するワーキング」に附属図書館職員がメンバーとして参加する等、開始に至るまでの教員と職員との連携や、支援内容について報告する。

2. 東京学芸大学および
附属図書館について

東京学芸大学は、13の附属学校を有する教員養成系の国立大学法人である。学部は教育学部のみで、教育者としての学問を究める「教育系」と、広く教養を高める「教養系」に分かれており、「有為な教育者」を理想に掲げている東京学芸大学の理念がそのまま教育組織になっている。

学部生数は2007年5月現在5,077名(教育系2,751, 教養系2,326)で、大学院生と特別専攻科生を含める学生総数は約6,000名となる。学生合計には含まれないその他の学生(研究生, 科目履修生等)は約350名いる。

附属図書館は本館のみ。蔵書数は2007年3月31日現在864,087冊(和書626,998, 洋書237,089)である。特色としては、江戸期の往来物に始まる初等中等教育用教科書の収集があげられる。また、文部科学省検定済教科書は網羅的に収集している。

3. 情報リテラシー教育支援開始に至る経緯

■2005年度以前

附属図書館では、新入生を対象としたオリエンテーションをはじめ、学部生・院生を対象とした文献の探し方オリエンテーション、学部生から教員までを対象とした電子ジャーナル講習会および資料や文献情報の検索指導・検索実習を受け持つ授業支援などさまざまな情報リテラシー教育・授業支援活動を行っている。しかし、これらの活動は受講を希望する学生や教員ならびに一部のクラスの学生のみを対象としたものであった。

例えば、授業支援は共通科目(選択)「文献・情報へのアクセス」と、科目の学年を問わず教員からの個別の申込みによるもののみ実施していた。授業に図書館職員(2004年度以前は参考調査係, 2005年度係名変更により情報リテラシー係)が出張し、依頼内容により図書館利用方法や各種データベース検索方法を説明するという形である。

2004年度実績: 10クラス 12コマ

2005年度実績: 14クラス 15コマ

おおたに あけみ: 東京学芸大学附属図書館

キーワード: 大学図書館, 教員連携, 情報リテラシー教育支援

■情報リテラシー教育支援試行に向けて

前述の活動を広げようと考え、カリキュラム改訂実施検討委員会委員長宛「情報リテラシー教育支援の導入の検討について（依頼）」（2005年7月22日付、発信者・附属図書館長）により、2007年度におけるカリキュラム改訂において1年前期必修科目に、情報リテラシー教育支援活動を組み込む方策の検討を依頼した。

その後、情報教育授業運営委員会委員長宛「情報リテラシー教育支援の試行の検討について（依頼）」（2006年1月5日付、発信者・附属図書館長）により、カリキュラム改訂に先立ち、2006年度1年前期必修科目である共通科目情報領域の「情報処理」において、情報リテラシー教育支援試行の導入についての検討を依頼した。

情報教育授業運営委員会委員長より担当教員に試行の連絡をとってよい旨の連絡を受けた後、2006年4月、2006年度共通科目「情報処理」担当教員へe-mailによる支援試行希望調査を行った。結果、全28クラス（教員23名）中、20クラス（同16名）から希望があった。

■2006年度情報リテラシー教育支援試行

2006年5月から6月にかけて図書館職員（2006年度情報処理授業支援ワーキンググループメンバー7名—情報リテラシー係2名と学術情報部在籍図書系職員のうち係員5名）による、授業の1コマにおける情報リテラシー教育支援が試行された。日程はできるだけ教員の希望に沿うように設定された。

支援は、担当職員がプロジェクターにパワーポイント資料およびネットワーク接続画面を映して解説し、受講者は必携のノートパソコン（本学では2003年度の1年生より個人で用意するように定められている）で実習するという方法をとった。

内容は以下のとおり。

- I 担当教員による授業開始
- II 図書館資料の紹介
- III 図書館ホームページの紹介
- IV 資料の探し方（検索実習含む）
 - 1 OPACでの図書検索
 - 2 Webcatでの図書検索

3 OPACでの雑誌検索

V 他のデータベースの紹介

VI アンケート

VII 担当教員による授業終了

検索実習では、クラスの専攻により各支援担当者が問題を作成した。理系であるので雑誌検索を中心にしてほしいという教員からの希望により、Webcat検索を雑誌に変更したクラスもあった。

2006年度は試行ということで、共通科目「情報処理」のうち、希望のあった教員担当のクラスのみであったが、多数の申込みがあり、1年生の約3分の2（1年生総数1,267名・受講者数834名）に情報リテラシー教育支援を行うことができた。

教室での質疑応答およびアンケートでは、担当教員はもちろん学生からも貴重な要望やアドバイスが寄せられ、2007年度実施に向けての具体的な課題解決につながる大きな成果が得られた。

担当した図書館職員もそれぞれの日常業務を遂行しながら、新たな事業の企画、準備および試行的実施に参加するという難しい課題に積極的に取り組み、情報リテラシーという分野での教育支援の可能性を実感し、今後の展開に必要なノウハウを蓄積・共有することができた。

■情報リテラシー教育支援正式導入に向けて

カリキュラム改訂実施検討委員会委員長宛「平成19年度における情報リテラシー教育支援の導入の検討について（依頼）」（2006年9月27日付、発信者・附属図書館長）により、2005年度の検討ならびに2006年度の試行実施の結果を踏まえ、2007年度新カリキュラムにおける1年前期必修科目に「図書館の情報リテラシー教育支援活動」を組み込む方策につき、あらためて具体的な検討を依頼した。

カリキュラム改訂実施検討委員会からの依頼により、情報教育授業運営委員会のもとでプレワーキングの時代から検討を重ねてきた『『情報処理』の授業内容・教材のあり方等に関するワーキング』第2回（2006年12月6日）において、前期の授業期の第2週に附属図書館による情報リテラシー教育支援を行うというガイドラインが内定した。

さらに、支援の授業内容についてもワーキングが定める「情報処理」の授業の「ねらいや目標」に対応したものにすべく、ワーキングのメンバーに担当職員が入るのが望ましいという結論に達した。

これを受け、12月15日付けで、カリキュラム改訂実施検討委員会委員長から附属図書館長宛に『「情報処理」の授業内容・教材のあり方等に関するワーキングメンバーの委嘱について（依頼）」が出された。

この委嘱依頼を受け、附属図書館の担当職員として情報サービス課情報リテラシー係長が第4回（12月21日）から第10回（2007年2月15日）の「授業内容・教材のあり方等に関するワーキング」に参加した。

そして論議を重ね、情報教育授業運営委員会『「情報処理」の授業内容について』（2007年2月15日）（表1）に「学術情報の検索と活用」として附属図書館による情報リテラシー教育支援が盛り込まれたのである（図1）。

4. 2007年度情報リテラシー教育支援

■実施方法

情報教育授業運営委員会『「情報処理」の授業内容について』に従い、学部1年生の必修科目で

表1 情報教育授業運営委員会『「情報処理」の授業内容について』（抜粋）

<p>ねらいと目標（シラバス掲載事項）</p> <p>本授業科目は、高度情報化社会における技術の発展やそれに伴う社会の変化に対し、主体的に対応できる能力と態度を育成することを目指し、全学共通の基礎科目として設置された。また、本授業科目は教育職員免許法上の必修科目「情報機器の操作」に対応し、教員および社会を支える一員として必要な情報機器の操作を題材とした実習中心の授業形態をとる。（後略）</p> <p>内容（シラバス掲載事項）</p> <ol style="list-style-type: none"> ①オリエンテーション ②学術情報の検索と活用 ③コンピュータの仕組み ④情報通信とインターネット ⑤WWWと電子メール ⑥情報と社会 ⑦文書作成 ⑧表計算 ⑨音と画像のデジタル表現 ⑩プレゼンテーション ⑪ウェブページ作成と情報発信 <p>授業スケジュール</p> <p>内容①と②は第1回目および第2回目に実施し、時間の変更はできません。（後略）</p>
--

図1 『「情報処理」の授業内容について』より附属図書館担当部分

<p>情報処理 ②（附属図書館）</p> <p>学術情報の検索と活用</p> <p>© 2007 東京学芸大学情報教育授業運営委員会</p>	<p>情報検索</p> <ul style="list-style-type: none"> ■必要性 <ul style="list-style-type: none"> ・データベースとインターネット ・（従来の）データベースシステム ・データベースシステムへの Web インターフェース ・WWW=データベース ■インターネット検索の基礎 <ul style="list-style-type: none"> ・検索エンジン（ロボット型とディレクトリ型） ・情報の信憑性・信頼性 	<p>学術情報の基礎</p> <ul style="list-style-type: none"> ■印刷メディアと電子メディア ■図書と雑誌 ■一次資料と二次資料 ■書籍情報と所在情報
<p>データベース</p> <ul style="list-style-type: none"> ■選択方法 ■検索方法 <ul style="list-style-type: none"> ・キーワード検索 ・検索演算子（AND, OR, NOT） 	<p>情報の活用①</p> <ul style="list-style-type: none"> ■東京学芸大学附属図書館資料 <ul style="list-style-type: none"> ・OPAC ■他機関資料 <ul style="list-style-type: none"> ・Webeat Plus（OPACから連続検索） 	<p>情報の活用②</p> <ul style="list-style-type: none"> ■論文情報 <ul style="list-style-type: none"> ・CiNii ■その他の情報

ある共通科目「情報処理」の1コマ(第2週)に図書館職員(2007年度情報処理授業支援ワーキンググループ)が出張。担当教員の指導のもと、以下のことを行う。

- ・プロジェクターにパワーポイント資料及びネットワーク接続画面を映し、解説(写真1)。
- ・受講者は必携のノートパソコンで実習。

■日程

- ・4月20日(金) 3限2クラス
- ・4月23日(月) 2, 3, 4, 5限各2クラス
- ・4月24日(火) 1, 3, 4, 5限各2クラス
- ・4月25日(水) 1限2クラス
- ・4月26日(木) 2, 3, 4, 5限各2クラス

■担当者及び担当クラス数

- ・学術資料係員1 3クラス担当
- ・学術資料係員2 2クラス担当
- ・学術ポータル係員 2クラス担当
- ・相互利用係員 3クラス担当
- ・情報リテラシー係員 9クラス担当
- ・情報リテラシー係長 9クラス担当

■受講者数

受講者数は1,204名である。学務課から連絡のあった各クラス配当数合計は1,195であったが、未履修生も受講しているので1年生総数より多くなっている。

■配布資料

- ・「学術情報の検索と活用」(パワーポイント資料)
- ・「実習課題」(各クラス共通)
- ・「TIPS for LIBRARY ②図書・雑誌を探す」
- ・「TIPS for LIBRARY ④学芸大OPACを使う」
- ・「TIPS for LIBRARY ⑥CiNiiを使う」
- ・「TIPS for LIBRARY ⑨学外の図書館を使う」¹⁾
- ・アンケート用紙
- ・「実習課題解答」(これのみ授業終了後配布)

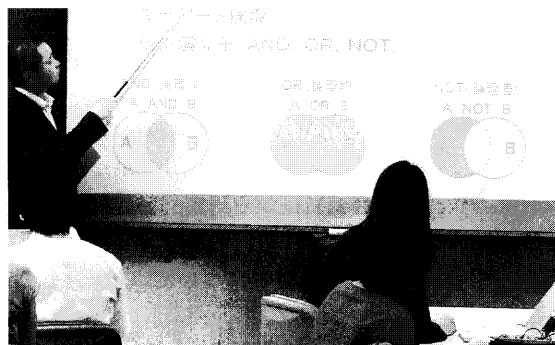


写真1 情報リテラシー教育支援の授業より

■学生アンケート結果

受講した学生に対して選択式および記述式のアンケートをとった。選択式の結果は表2のとおり。

「ご意見、ご感想をご自由にお書きください」の自由記述では計378件の書き込みがあり、「よかった」ととれる内容のもの180件、「よくなかった」ととれる内容のもの144件、その他の内容のもの54件であった。

「よくなかった」ととれるものが144件あるが、「ペースが早い・難しい」が54件、「ペースが遅い・必要ない」が15件で、半数以上の75件はネットワークの遅さに対するもので、支援内容についてのもではなかった。

○「よかった」ととれる記述例

- ・基本的なことからわかって、不安がなくなったのでとてもよかったです。
- ・いくつものデータベース・検索システムを使い分けており、見つけるものに応じてそれぞれ最適なものを使うと効率が良いと初めて知りました。必要な資料があったときには、図書館を最大限に活用したいです。
- ・論文の載っている雑誌のさがし方は教わらないとわからなかっただろうと思うので、今日の授業があってよかったです。
- ・図書館の利用だけでなく、検索方法は多くの面で活用でき、やり方が分かって良かった。

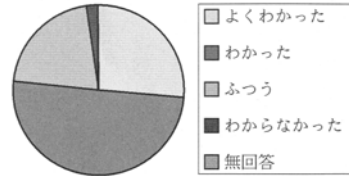
○内容に対する不満(ペースが早い・難しい)の記述例

- ・多くの情報を短時間で説明されたため、自分でできるか、多少不安です。
- ・便利だとは思いますが、パソコン苦手な人には

表2 学生アンケート結果

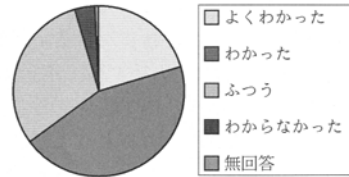
Q.1 OPACの説明や実習はいかがでしたか？

よくわかった	わかった	ふつう	わからなかった	無回答	計
312	593	253	26	0	1,184



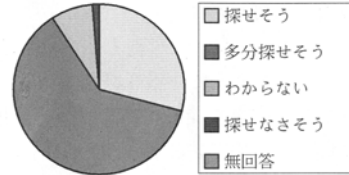
Q.2 Webcat Plus の説明や実習はいかがでしたか？

よくわかった	わかった	ふつう	わからなかった	無回答	計
244	523	366	46	5	1,184



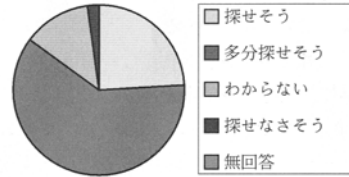
Q.3 今後自分で図書を探せそうですか？

探せそう	多分探せそう	わからない	探せなさそう	無回答	計
344	731	94	14	1	1,184



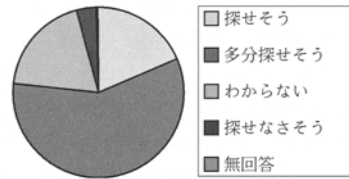
Q.4 今後自分で雑誌を探せそうですか？

探せそう	多分探せそう	わからない	探せなさそう	無回答	計
286	719	154	24	1	1,184



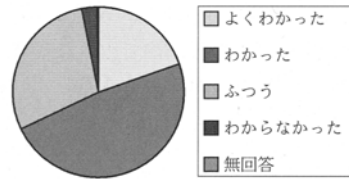
Q.5 今後自分で雑誌論文を探せそうですか？

探せそう	多分探せそう	わからない	探せなさそう	無回答	計
220	685	229	48	2	1,184



Q.6 今日の授業は全体的にどうでしたか？

よくわかった	わかった	ふつう	わからなかった	無回答	計
230	574	345	31	4	1,184



キツいです。

- ・説明を聞いているときは理解できたと思っても、実際やってみるとうまくいかないこともあった。
- 内容に対する不満（ペースが遅い・必要ない）の記述例
- ・説明がゆっくりすぎて、少しつかれた。あと、PowerPointの画面を印刷したプリントはいらなと思う。
- ・このくらいのこと、説明がなくてもできないとマズいんじゃないでしょうか。
- ネットワークの遅さに対する記述例
- ・分かりやすかったですが、実習の際にOPACが動かなくなったのが残念でした。
- ・ネットがこみあうのがどうにかできないのですか？

■担当教員からの意見（抜粋）

「担当クラスの学生たちにとってははじめての経験だったようで戸惑う点も多かったようですが、総じて前向きに受け止め、まじめに取り組んでいたという印象です。1年生の前期にレポートの書き方について教える共通科目が必要なのではないかと前から思っているのですが、情報処理はそのような機会になりえますし、図書館利用についての情報提供は特に重要な一部をなすと思います。学生・教員（私自身も含めて）ともに、図書館で利用可能なサービス（特にデータベース、電子ジャーナル）が間断なく進化しているということについて、あまりよくわかっていないことが多いという感想を持っていますので、このような授業はたいへん貴重だと考えます。

また、この授業で学んだ知識が他の授業での課題と有機的に連結しているとさらによいのだろうと思います。この回の授業のみ単独で完結してしまうと、実際に図書館を利用しなければならない時（学期末あるいは学年末）にはすっかり忘れてしまっている可能性もありますから。できれば1年前期の様々な授業内で出される課題が、情報処理の授業でやったことを意識していることが望ましいと思います。

もう少し細かい点でいうと、学生にとっては、書籍の物理的所在を知るためのデータベース

(OPAC)と論文の所収を知るためのデータベース(例えばCiNii)との違いを理解するのが難しかったようです。論文の所収を知った上でその雑誌なり図書なりの場所を探すという二段構えになっていることを理解させるためには、ほんとうは図書なり論文なりを物理的に借り出すという経験が必要なのかもしれません。」

5. おわりに

2006年度の試行を経て、2007年度から正式に、共通科目「情報処理」のうちの1コマとして情報リテラシー教育支援を行うことができた。これで学部1年生全員に「学術情報の検索と活用」を聞いてもらえたことになる。

『情報処理』の授業内容・教材のあり方等に関するワーキングのメンバーに附属図書館職員が委嘱され、情報教育授業運営委員会「『情報処理』の授業内容について」に情報リテラシー教育支援が盛り込まれたの教員との連携による支援スタートは、大きな成果といえよう。

そして、この支援に全館体制で取り組むことができたのは、もともと新入生オリエンテーション等で各課や係にこだわらず協力してきた経緯があり、毎月の係長会議等をおして最重要課題のひとつと位置づけることができたこと、そしてその結果、若手係員を中心に結成された「情報処理授業支援ワーキンググループ」の頑張りによるところが大きい。ワーキンググループメンバーである各係員はそれぞれの係長の協力を得て仕事の配分を調整したとはいえ、1週間で28クラスすべてに支援するということは大変ではあったが、新入生全員が早い時期に「学術情報の検索と活用」を聞き、実習することによって、今後の学生生活に大きなプラスになったのではないだろうか。

しかし、前年度の試行時に比べ、講義内容は増えている。支援担当者のなかには前半の内容を話すことに戸惑ったものもいた。学生アンケートでは「ペースが速い・難しい」という記述に対し、割合は減るが「ペースが遅い・必要ない」というものもあり、それは前年同様である。学生のレベルが違うことにどう対応していくかが、やはり今

後の課題の一つに挙げられる。

また、サーバおよびネットワーク環境の問題が解決されない限り、同一時間帯に2クラスの支援は難しいと考えられる。ネットワークの問題により実習がスムーズにできないのであれば、せっかくの支援が十分に生かせない。次年度は内容の再考はもちろんのこと、支援の時間割についても対策が必要と思われる。

なお、「情報処理」における支援試行と正式支援を行った2006年度以降も個別の申込みによる授業支援は続けており、2006年度実績は12クラス15コマ、2007年度は前期終了時で4クラス5コマである。

6. 追記

『「情報処理」の授業内容・教材のあり方等に関するワーキング』のメンバー教員からの奨めがあり、平成19年度情報教育研究集会（主催：大阪大学，後援：文部科学省（予定），国立大学情報教育センター協議会，独立行政法人メディア教育開発センター）にワーキングメンバー教員全員との連名で、「附属図書館による情報リテラシー教育支援」という題目で発表をすることになった。登壇者は筆者であり、11月10日口頭発表予定である。

*平成19年度情報教育研究集会ホームページ

<http://conf2007.cmc.osaka-u.ac.jp/>（参照2007-10-26）

<注>

1) 「TIPS for LIBRARY」

附属図書館の資料やサービスを充分に利用してもらうための、情報リテラシー係作成ガイドシリーズ。附属図書館ホームページにも掲載している。

<https://library.u-gakugei.ac.jp/tips/>（参照2007-10-26）

（2007.10.26 受理）